

矢作川の“見張り番”から 森の“再生活動”へ

愛知県 豊田市立 ^{にしひろせ}西広瀬小学校

6年 米良 遥
4年 安藤 洋介 三宅 健輔 生田 修大
大木 咲恵 古賀 友里愛



学校紹介



本校は 1873 年、明治 6 年創立 139 年の歴史があります。全校児童 46 名の小規模校ですが、みんな元気いっぱいです。豊田市のほぼ中央にあり、愛知県を南北に貫く矢作川の右岸に位置しています。校舎の 3 階に上ると、矢作川が眼下に望まれ、緑豊かな里山と共に美しい景観を見せてくれます。

このように、恵まれた自然環境、なかでも矢作川を教材とする環境教育が活発に行われてきました。とくに、高度経済成長期（全国で公害問題が発生した頃）に始まった“矢作川水質汚濁調査活動”は、陶土採掘で白く汚れてしまった「ふるさとの川を守りたい」という情熱から生まれた活動です。すでに 36 年間も続けられており、豊田市内では知らない人がいないほど有名な活動となっています。マスコミにも何度も取り上げられ、幾多の表彰も受けている。子供たちもこの活動を誇りに思い、高学年になると毎日の当番活動として調査を続けています。

活動場所

学校のすぐ西隣に^{まるねやま}円根山という小さな山があります。祖父母の世代に話を聞くと、「よく登って遊んだ」「昔の校歌にも歌われていた」「この山から尾根伝いに他の山へも探検に出かけた」というような声が聞かれました。今はほとんど登ることもなく、薪炭材として切り出されることもなくなったため、アベマキ、アラカシ、コナラなどが大きく伸び、その森に竹が進入して“荒れた山”になっていました。「円根山を憩いの場として復活させたい」「樹木や野鳥 昆虫などを観察できる場にした」という声が、子供たちの中に広がり、円根山ビオトープとして再生する活動に取組始めました。

まず、高学年を中心に竹の伐採から始め、250本程の竹を切り出しました。また、登りやすくするために、杭を打って階段を 1 段ずつ造っていきました。材木が肩に食い込み、手にマメができる大変な作業でしたが、西斜面に階段を完成させることができました。現在は、東斜面の階段造りに取組んでおり、今年中には 2 本の山道が完成する見通しが立ちました。



サミットに参加してみよう...

今復の夢・希望・活動計画



円根山の東にはササユリの群生地があり、小川にはサワガニも生息していることが分かりました。また休耕田には 10 種類以上のトンボが飛翔します。これらを観察して特徴を調べ、さらに棲みやすい環境を整えるために「里山ビオトープ」を形成していこうと考えています。

さらに、ESD（持続可能な発展のための教育）の考え方を取り入れ、過疎化でさびれつつある里山の活性化を子供たちの意識変革を重視して図ろうと思います。子供たちの中には、自分の家の持ち山に関心を持つ子も現れています。いつか、「自分のふるさとを自分たちの手で盛り立てていかなければ」という意識が育っていけばと思います。

子どもサミットで学んだ、全国の多様な取組の中から、ふるさとを愛する気持ちや森を守り、森で楽しもうとする意欲を汲み取り、自分たちの活動に生かしていこうと考えています。ササユリサミットやビオトープサミットという取組も実施していきたいと思っています。



矢作川の“見張り番”から森の“再生活動”へ！

愛知県豊田市立西広瀬小学校

西広瀬小学校の3階に上ると、すぐ目の前に矢作川、その周囲には緑豊かな里山をながめることができます。このような環境の中で、地域みなさんと共に、矢作川を大切にしようとする心が育まれてきました。

中でも、矢作川水質調査活動、東海自然歩道の整備活動、ホタルの保護活動は、35年以上の伝統があります。また20年前に完成した「水族館」では、矢作川に生息する魚類のカワムツ、オイカワ、モロコなど、多くの魚類を観察することができます。さらに、矢作川の支流である飯野川の清掃、水質・水生生物・魚類調査などもすでに18年間に渡って行っています。



矢作川から採水する



透視度の結果は道行く人達に知らせる

このような環境活動の伝統を受け継ぎながら、さらにそれらを発展させるのが私たちの役割だと思っています。

「西広瀬小学校を訪れるお客様は、どの方も「ここには、自然がたくさんあっていいね」と言われます。「私達自身も緑がいいね」という思いがありました。

でも、学校のすぐ西にある丸根山を見ても、間伐がされなくなったので竹が山の中に入り込み、頂上に登っても全く景色が見えません。それは丸根山に限らず、手入れをされなくなった里山には、陽の射さない荒れた森が広がっていることが分かりました。

環境活動を進めている、西広瀬小学校の周囲の里山が荒れているのは、ちょっと恥ずかしいような気がします。この気付きから丸根山を再生する活動が開始されました。お年寄りの声を聞くと、昔は子供たちや地域の人達がよく登り、尾根伝いに里山を行き来したそうです。シイタケのほだ木を取ったり、炭焼き用に木を切ったりして、山がよく整備・利用されていたと知りました。

「山道があれば、小さい子やお年よりも登って来られそうだ」という思いが、みんなの心に広がりました。それを実現させるため、「総合的な学習の時間」やクラブ活動の時間を利用して、丸根山整備を始めました。

まず竹の伐採から始め、東斜面だけで120本ほどの竹を切りました。山の作業は、とても大変です。竹の枯れ枝は顔に刺さってとても痛いし、暑さと湿気と蚊に悩まされます。それでも、竹が無くなって森に光が差し込むのを見るのはとても気持ちがいいし、森を守ることの苦勞と大切さを実感できます。まだ始めたばかりの活動ですが、森も川も含めた里山ビオトープととらえることで、伝統の水質調査などをさらに進化させることができそうです。

そして、今まで目を向けることが無かった里山体験をしたことで、“ふるさと西広瀬”を守ってきた人達の気持ちが少し分かってきたように思います。



山道と階段が完成



竹の切り出し「OK！受け取ったよ」

森林環境教育の実践について

1. これまでの実践の成果（実践の効果や子どもの成長、今後の期待など）

「先生、竹を切りに行こうよ。ちょっとぐらい雨が降ってても平気だよ」学校のすぐ西にある丸根山を整備し始めた時に4年生の子が発した言葉だ。

本校は、環境教育が盛んで、矢作川の水質測定などの活動を35年余に渡って実施してきた伝統がある。従って、子供たちの環境活動に対する意識には高いものがある。

しかし、長年に渡って先輩達から受け継いできた活動を淡々と継続している、という傾向があるのも事実であった。自分たちの発想で、自然の中で汗を流して体を動かし、知恵をはたかせる活動として、森の活動を取り入れた結果、上記のような子供たちの声が聞かれるようになった。

準山間部にある本校の子供たちも、生活様式は都会の子供たちと大差はない。塾や習い事によって下校後の自由時間は減少し、ゲームやカード遊びで、外遊び・活動の体験は豊かとは言えない。

そんな子供たちが、山に分け入り、斜面で足を踏ん張って竹を切った。ハラハラする場面も見られたが、徐々に切り方のコツをつかみ、道具の使い方も様になってきた。切った竹は、どう斜面を滑らせるか、下にいる友達にどんな声をかけたらいいのか・・・身体のバランス、道具の使用、他者との協力・・・現代っ子に不足しがちな“栄養素”の宝庫である。そんな活動に発展できた。

今後は、ESD（持続可能な開発のための教育）とビオトープの考え方を取り入れ、「里山ビオトープ」として捉え、伝統的な環境学習も統括して取組んでいきたいと考えている。

2. 実践の課題（苦労したことや困ったことなど）

学校林を整備する際、ノコギリやナタ、保護メガネやヘルメットといった道具や装備が必要となる。それらを準備するには予算的、管理的な面で難しい点がある。

また、山道造成や樹木の伐採に必要な資材や道具類、人手の確保にも経費が伴うため、助成金申請などをする必要があった。

さらに、山主さんに理解していただくこと、境界線の把握などにも気を配った。

3. 課題への対応（工夫したことや課題の解決策など）

費用面の課題は、環境財団に助成金を申請し認可されたため、ほぼ解決できた。人手の確保も、教職員の協力や区長を始めとする地域住民の協力を得られる見通しが立った。

山主さんとは、社会科の「昔のくらし」の学習の際にインタビューに出かけるなど、子供たちとのつながりをつくるようにした。

また、竹の伐採など、比較的短時間にできる作業を子供たちに割り振ったり、作業の前に下準備を整えたり、山道や頂上の整備のアイデアを構想（想像）を図に描かせたりすることで、子供たち自身が「自分たちの活動」と認識できるようにした。

4. その他（今後の計画や方向、抱負や希望など）

夏休みなどを利用し、教職員の作業日を設定したり、地域の方に大きな樹木の伐採をお願いしたりすることを通して、みんなで創り上げる活動に広げていきたい。

現在は、頂上付近にも樹木が密生しているため景色が全く見られないが、伐採を行うことで眺望が開ければ、活動に関わる人達の意欲が高まることが予想される。

本年度だけで終わらせられる活動ではないので、息長く継続できるようにし、関わった全ての人たちに、“ふるさと意識”が芽生えることを願っている。

にしひろせ
愛知県 豊田市立 西広瀬小学校

北潟国有林と考える



福井県 あわら市 ^{なみまつ}波松小学校

6年 池神 康太
5年 山口 歩美

学校紹介

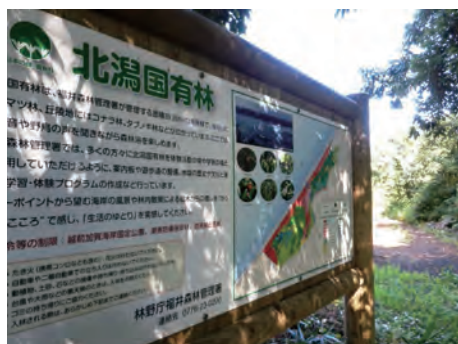
波松小学校は、福井県の最北端のあわら市にあり、北陸有数の温泉“あわら温泉”街から車でおよそ10分、野菜や果樹の栽培がさかんな北部丘陵の波松地区にあります。波松地区は、日本海に接しており、マツ林がせまる浜で行われる春と秋のマラソン大会をはじめ、地引き網体験、海岸清掃活動は欠かせない学校行事です。

完全複式校で児童数は少ないが、北潟湖で毎年行われる“カヌーポロ大会”で上位入賞を続ける等、大きな学校に負けない頑張りがあります。



各小学校の取組 ⑩

活動場所



きたがた きたがた
北潟の森（北潟国有林）は、越前海岸国定公園内・石川県境に近い福井県にあり、潮害防備保安林となっている。北前船寄港地の三国湊から吉崎御坊・加賀方面へと至る「浜街道」、植生にあわせて名づけられた「マツの道」「ツバキ回廊」などの遊歩道が整備されている。遊歩道を歩きながら、植物・木の実、鳥などの生き物とともに潮さいから、森と海の2つの季節の移ろいを味わうことができます。歴史と自然に加えて、風力発電の大きく白い風車が、北潟の森とあわせた新しい景観となってきている。

サミットに参加してみよう… 今復の夢・希望・活動計画

今年から取組んでいる、クロマツの苗木を北潟の森から種を採り、学校で育て植樹する活動「森づくりプロジェクト」に協力していきたい。波っ子にとってより身近な自然は「野（畑）」であり「海」であるが、その周囲をとりまく「森」に関する活動に取組むことで、波松地区をとりまく「野（畑）」「海」「森」の係わりを考える学習へひろげたい。なお、北潟の森の再生とともに、秘密基地や遊具の整備がされて、イベントができたらいいなあとの児童の声がある。



活動テーマ

北潟国有林と考える



福井県あわら市波松小学校 6年 池神康太 5年 山口歩美

活動の様子Ⅰ「クロマツを植える」



活動の様子Ⅲ「枝打ち作業」



活動の様子Ⅱ「森林教室&リース作り」



活動の様子Ⅳ「森づくり教室」



(これからの活動)

学校の畑で、北潟国有林のクロマツから種をとり、苗木に育て、3年後に森に植える

森林環境教育の実践について

1. これまでの実践の成果（実践の効果や子どもの成長、今後の期待など）

- ① 国有林についての学習活動や体験活動により、学校近くで日常見られる植物（花）や虫（昆虫）などへの関心が高まってきた様子がうかがえる。また、高学年が低学年に、植物や虫の名前を教えるだけでなく、その植物の育て方や成長の様子を話している姿も見られてきた。低学年は、学校園での野菜の栽培活動において、水やりや日々の記録などで積極性が出てきている。

2. 実践の課題（苦労したことや困ったことなど）

- ① 単式学級から複式学級へとなったため、学習活動・体験活動をどの学年で行うかの検討が必要であった。
- ② また、「みどりの少年団」活動に取り組んでいるほか、学校園での栽培活動、校区内での「花いっぱい運動」「清掃ボランティア活動」など多くの体験活動に取り組んできた。学年ごとの人数も少なく、計画を始めた段階では、ある1学年、あるいは2学年であったものが、学年範囲が広がっていき、全校での活動となっていくことがあった。
- ③ 北潟国有林は校下の外にあり、児童にとって身近なものでない。
- ④ 北潟国有林に出かけるには時間がかかり、費用もかかる。
- ⑤ 教員の中に、専門性を持ったものがない。

3. 課題への対応（工夫したことや課題の解決策など）

- ①② 学年を広げれば、同じことに2年以上取り組むことになり、児童の意識低下が懸念されたが、繰り返し行うスパイラル方式によって定着が進み、活動内容と活動意識ともにレベルアップされることを期待して、学年幅を拡大して取り組むこととした。
- ③④⑤ 北潟国有林における活動は、専門性を備えたフォーレストサポーター、自然保護活動会員、森林管理署職員の方々の指導を受けて行うこととし、学校における活動は、通常の教科活動、総合的な学習の時間、学校園での栽培活動を行うこととした。

4. その他（今後の計画や方向、抱負や希望など）

- ①「あわらの自然を守る会」が中心になって計画している“北潟国有林の松を種から育てまた国有林に植樹する”活動に参加する。「森づくり教室」の講義とともに「松かさ拾い」「松の植替え」「幼木の成長記録と保護」「北潟国有林への植樹」までの3年余りの長期にわたる活動に取り組む。
- ② 国有林が持つ海岸林の役割から、「森」「海」「野」を絡めた環境学習の展開を考える。
- ③ 国有林内に残る「浜街道」と呼ばれる古道の整備にあわせた、学習活動の展開を考える。

福井県 あわら市 なみまつ 波松小学校